

第1章 Stock建築の購入と新設学部への対応



キャンパス新設の背景

企業の保有する閉鎖された広大な研修施設跡地は、平成14年から鈴鹿市を事業主体とした利用転換計画策定協議会により、薬学部等を計画のコア機能とした産業振興や市民の健康福祉向上を目的に有効活用を図るという結論に至った。この計画は、三重県の目指すメディカルハロー構想と合致しつつ、医療福祉系の総合大学化と地域との共生を目指す鈴鹿医療科学大学の方針とも合致しており、三重県下における初の薬学部設置は広大な敷地の中に教育施設としての基本条件の整ったこの地に定められた。

敷地内には教育施設のほか、研修宿泊施設・陸上競技場・野球場・競泳プール・体育館・武道場など、相当数の施設があったが、大学としての要素を満たす利用価値の高い建築群の部分を活用して平成20年4月の開学を目指してリニューアルを進める計画となった。該当の建築群には第6回・第13回の中部建築賞の入賞作が含まれており、サステナブル（持続可能）なStock資産の活用が図られた。

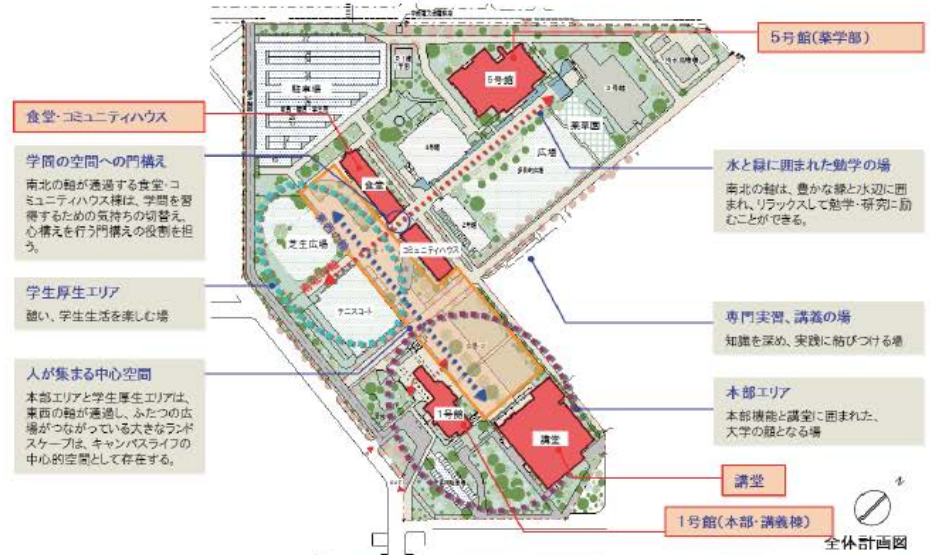
既存建物のポテンシャルを最大限に発揮する

今回のキャンパス計画で豊かな緑に囲まれた敷地と既存建築群が有する特性を最大限に活用しリニューアル手法により整備となった。既存の施設が本来もつ特性をよみがえらせる事に加え、新たな機能を付加することで鈴鹿医療科学大学薬学部設置の目的を果たす計画とした。7年間の未利用期間を経た外構施設の復旧・改修と1号館・5号館・講堂・コミュニティハウスの4棟をリニューアル対象としている。

構内には建築群を地下で縦横に結び給排水やガス・電気系統が通る共同溝が存在し、これを再整備することで揺動を最小限に抑えている。工事事務所を解消対象外の2号館とし、仮設物も最小限である。ソメイヨシノの名所でもある構内にはできる限り掘削を抑えた計画とすることで多くの樹木の保全が可能となり、現在も市民の親愛の場として人気を博している。

大学・地域のさらなる発展へ貢献する

鈴鹿医療科学大学では新設の白子キャンパスと千代崎キャンパスとを総合的に活用する構想が検討されており、新設学部開設後の白子キャンパスの2号館・3号館・4号館の未使用Stockの活用を模索している。こうした大学の構想に既存のStock建築が十分に対応し構想実現を可能にすることで、過去からのStock建築が現在・未来にわたり貢献していく。現在では大学用地以外の部分も利活用計画が進んでおり、実現の暁には地域全体で過去から未来へのサステナブル（持続可能）な計画となっている。



平成19年の計画時点のもの
鳥瞰パース

第2章 新たな学部創設と未使用Stockの更なる活用



左 2号館
正面4号館



4号館



2号館



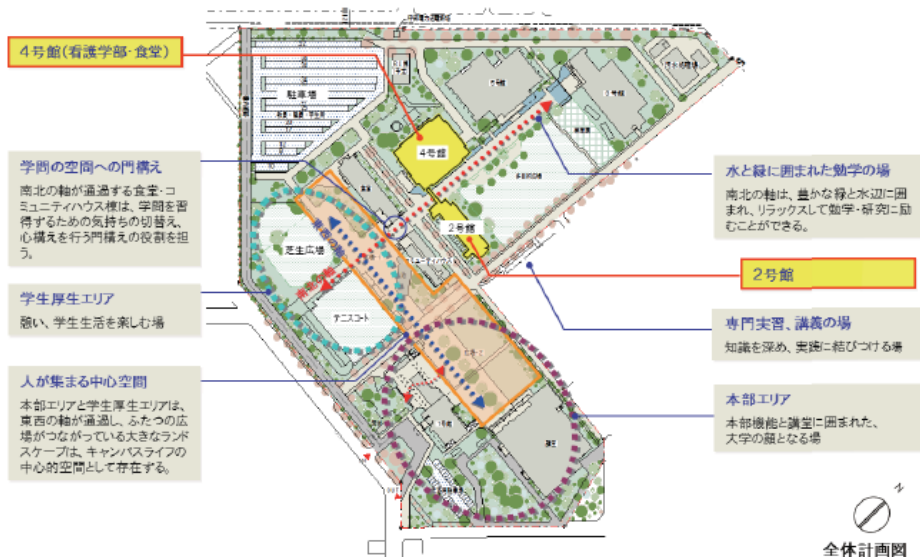
4号館 実習室



4号館 実習室



4号館 実習室



看護学部創設・今後の展望

三重県内で看護師を要請する4年制大学としては4校目の創設であり、県内での看護師不足に貢献する。看護師養成により医師とともに専門領域を分担しながら患者を治療する「チーム医療」を広範囲にカバーされ、医療・福祉系総合大学として充実する。

今後、大学運営における病院や福祉施設との連携など大学の構想上も看護学部創設は意義深く、地域医療やチーム医療に貢献できる看護師や保健師の育成を目指す。従来学部との連携が特色の新たな学部創設は、平成20年から業学部として活用される白子キャンパスにおいて未利用の4号館をリニューアルして機能的で快適な新たな勉学の場として整備するほか、新学部の学生や1年生・教職員が増えることによる食堂の不足を解消するために、地下の設備機械室等を食堂に改修して既存Stockを最大限活用となった。

快適な学びの場

看護を学ぶ場にあふらしく、内装やサインはやさしく暖かい雰囲気があり、ラウンジやリフレッシュスペースが各階に配置され学生が溜まれるよう計画されている。トイレは明るく清潔感のある空間として、既存部分を全面的にリニューアルされ、女性に嬉しいウダーコーナーを設置するなど快適に利用できるように配慮されている。

ゾーニング

南北の2箇所のコアを結ぶメイン通路を境に、西に大部屋、東に小部屋を配置した明確で効率的な良いゾーニングとなっており、南北を貫くメイン通路は光と風を取り込むゆとり空間が確保され、学生同士や学生と教師のコミュニケーションの場、自習の場、リフレッシュの場として利用されている。

断面ゾーニング

1階には白子キャンパスの学生が共通で利用できる講義室・セミ室・リフレッシュコーナー等が配置され、2・3階は看護学部専用で利用する実習室・研究室が集約されている。2フロアに集約することで動線が短くなり使い勝手の良い計画がなされている。機器等の搬入用エレベーターとして利用していた大型エレベーターがペダの移動も可能な大型エレベーターとしてオーバーホールされ、より高度な大型機械への対応を可能としている。

食堂計画

主に設備機械室であった地下1階は食堂となり、白子キャンパスの学生・教職員の増加による食堂の不足を補うために、キャンパス全体の食堂利用者の想定(学生+教職員の1/3程度)から既設食堂の食数除いた規模で計画された。既設の食堂等とともにキャンパス内でのイベント等に耐えうる様々なコミュニティ空間が提供される。既存ドライブインからの自然採光を有効に利用されるよう食堂スペースがレイアウトされ、明るく清潔な雰囲気の食堂計画がされている。利用者が集中する時間帯の混雑をできるかぎり解消されるよう出入口廻りがレイアウトされており、サービスマンと利用者動線を明確に分離されたことに加え、利用者動線と看護学部の動線の分離にも配慮されている。

2号館の学生利用

4号館と渡廊下でつながる2号館は、増加する学生の部活やサークル活動などに利用する。既存の安全性を検証したうえで劣化設備等は更改し、自由な活動の場を提供する。

第3章 既存建築群と対峙する新講義棟



3号館



3号館玄関ホール



3号館中央ホール



3号館講義室



3号館講義室



2号館手前 新講義棟建設地



教育改革によるスペースの不足

鈴鹿医療科学大学では基礎分野の学習内容を一新し「医療人底力教育」を新たに導入する教育改革を行っており、別キャンパスで行ってきた一年生の基礎教育の場を白子キャンパスに移動するよう計画していた。この計画では特別講義、グループ活動や学生が溜まれる場を整備する必要があり、1年生の共用科目の授業を主に行うための建物として未利用の3号館をリニューアルして活用するほか、教育改革に伴う学生の増加による講義室及び学生の居場所（ラウンジ）の不足を補うために新たな講義棟を必要としていた。

3号館改修計画

建物の完成度の高い3号館は類似用途で利活用するため、既存をできる限り利用し不足機能を補完するほかは全面的な多化改修で対応された。

1年生の共用科目の授業を主に行うための建物として未利用の3号館をリニューアルする計画で、中央の吹抜けホールに面して12の教室と自習室・中・小規模の講義室・解剖学実習室が既存の部屋割りをできる限り利用した形態となっており、3階は間仕切りによって小部屋を増やして事務部門と研究室として利用される。

建物機能を補完するため、建設当時は不要とされたエレベーターや多目的トイレなどが設置され医療系大学の講義棟としてふさわしく整備する。トイレは既存を全面改修して明るく清潔感のある空間にリニューアルし、女性のパウダーコーナーを設置するなど快適に利用できるよう配慮されている。

建物の外壁や屋上などは全面的な機能保全を図り、既存設備機器は動作確認、点検がされ、利用可能な設備は再利用して改修コストの低減が図られている。

新講義棟の建築（6号館）

新たに求められた講義棟は業学部設置時のゾーニングコンセプトに基づき「実習・講義の場」の中心に計画された。白子キャンパスにおける初めての新築建物に相応しい、機能性・環境性・デザイン性を兼ね備えた、既存建築群と調和しながらも新しいデザインを取り入れた、キャンパスの新たなシンボルとして創造された。

講義室と書店・学生ラウンジで構成され、ラウンジスペースはプレゼンテーションの場としても利用する計画となった。

高い天井を確保した空間と各室へのフラットアクセスのほか、各講義室にはAV設備の導入を想定した電源容量が確保され、エネルギー効率の良い設備・建物形態とすることで、長期にわたり運用可能な将来へのStock建築となっている。